

CLC からしだね書店便り

2025 August

no.56



今月のご案内

- ① 連載「歴史と対話し歴史に学ぶ」第8回
- ② からしだねCLC地下古書部から
らよとらるすさる
- ③ わたしの遺言 第三回
社会福祉法人ミッションからしだね 武山世里子
- ④ 読書感想本『日常を神とともに』 微細な現実にあられる神

CLCからしだね書店では…

- ① キリスト教書だけでなく、福祉、心理、精神、哲学、児童書、その他一般の良書もそろえています。
- ② お洒落でかわいい雑貨や小物もあります。
- ③ ブックカフェとして、ドリンクやスイーツ、ランチも提供しています。ゆっくり本を読みながら、お過ごしください。
- ④ コーヒーを飲みにきてくださるだけでもけっこうです。ドリンクを片手に、本をお楽しみください。
- ⑤ 古書のコーナーもあります。ほりだしものもあります。
- ⑥ 読書会や著者を招いての講演会など、人と人とが出会い、つながる「対話」の場を提供します。

CLCからしだね書店 & カフェ トライアングル
営業時間 11:00-17:00
定休日 日曜日と年末年始（※祝日も営業）
毎月第3木曜日は書店のみ営業



森下有一(高二) ..

入学してから一年がたちました。その時おじさんからもらった『パンセ』について、今日は質問します。世界の名著や岩波文庫など、いろんな訳がでていますね。なぜ、キリスト教古典叢書に入っている田辺保訳を選んだのですか。

山田はじめ(三七才) ..

『パンセ』はパスカルが一冊の本にするために書きためていた断章を後の人が編集したのですが、成立に関する研究が第二次大戦頃から飛躍的に進んでいます。その研究に基づいていることがひとつ。もうひとつは、訳者への個人的な思いです。田辺保は一九三〇年、『されどわれらが日々』の柴田翔の五年前の生まれでほぼ同世代ですが、その世界は異なります。こんなエピソードを書いています。人生の意味を求めて悩んでいた「大戦後の混乱と虚脱の日々、…まだ外国書の輸入もゆるされないその頃、一人の友人がふと古本で見つけてきた一冊のフランス語ウィック『編』の小型本『パンセ』をゆずり上げるため、その友人を手紙と訪問で攻め立てた。ネット時代からは想像もできないですが、僕はこの言葉に非常に惹かれました。パスカルの言葉を使うと、田辺さんは「呻きつつ求め」(四〇五以下ラフマ版番号) ながら訳したんだと思いました。

有一 ..

僕もその言葉には強く惹かれました。おじさんは以前、宗教が伝わっていくのは魂の叫びの共鳴による「第五回」、ということを書いていましたね。『パンセ』にどのような魂の叫びを感じたのですか。



「人間は考える葦である」というパスカルの言葉が孤独と深く結びついているという叔父さんの主張をめぐって、対話がすすみます

有一 ..

僕などは夜空を眺めるとロマンチックな気分になるので、「果てしないこの空間の広がりがいつも沈黙している、恐怖」(一〇〇)という短いパスカルの言葉には、強烈な印象が残りました。

はじめ ..

中世から近世にかけて、ヨーロッパで宇宙観がどう変化していったかを知ると、パスカルの感じた「恐怖」が理解できると思います。

中世はアリストテレスやトマス・アクィナスの考えがもたらされています。神が宇宙を創造し、宇宙の外にあってそれを支えています。重要な点は宇宙が有限で有機的な一体性をもっていることです。人間はその宇宙の中心として、安定した地位を得ています。(有機体的自然観)

ルネサンスに入ると、宇宙は無限だという考えが出て来ます。しかし、その無限の宇宙には神的生命が宿っていて、人間はそれと一体化することによって安定した位置を得ようとしています。(汎神論的内在論)

ところがパスカルの時代になると、宇宙に神的生命はなく、無機的な物質がただ無限に広がっているだけだという「機械論的自然観」が登場します。パスカルも当時の自然科学者としてその考えを前提にしています。彼は宇宙が無限大に延びてゆくとともにどこまでも無限小に向かって分解可能だと考えます。この自然は有機的な生命体ではなく、人間を包んでくれない。



はじめ ..

パスカルの孤独の叫びです。「人間は考える葦である」というパスカルの有名な言葉も孤独と深く関係します。

有一 ..

どういことですか。一般に、この言葉は人間の卓越した点は考えることにある、という意味だと思っていましたが。

はじめ ..

パスカルはこう書いています。

「人間は一本の葦でしかない、自然の中でもいちばん弱いものだ。だが、考える葦である。…宇宙が人間を押しつぶしても、人間はなお、殺すものより強いであろう。人間は、自分が死ぬこと、宇宙が自分よりもまさっていることを知っているからである。…わたしたちの尊厳のすべては、考えることの中にあります。まさにここから、わたしたちは立ち上がらなければならない…だから、正しく考えるように努めようではないか」(一〇〇)。

パスカルは思考一般ではなく、「ここから」、すなわち死の孤独と宇宙における孤独を「考える」ことから出発しなければならぬ、と言っていると思います。

有一 ..

なぜ死と宇宙における自己を「考える」ことが孤独と結びつくのですか。

はじめ ..

当時の宇宙観の変遷とパスカルの生涯(一六二三〜一六六二)を知ると、よく見えてくると思います。

パスカルは自然科学者の知性と繊細な心によって、この無機的な無限大と無限小の宇宙が人々に与える「恐怖」を徹底的に考えました。無限だと、上も下もなくなり、よって立つ基盤がなくなり。

「人間の混沌と悲惨のさまを見、沈黙の全宇宙を眺め、人間がなんの光もなく、ただひとり放り出され、この宇宙の片隅に迷い込んだかのように、だれが自分をここへ置いたのか、自分は何にをしに来たのか、死んだらどうなるのかもわからず、なにを知ることにも不可能な状態をつらつら眺めていると、わたしはぞっとしてくる。」(一九八)

一人カプセルに閉じ込められて宇宙空間を漂う様を想像すると、パスカルの「恐怖」が少し感じられるかもしれません。彼は宇宙を眺め、そこに足場もなく放り出されている孤独な自己を見出し、底なしの「恐怖」を感じたのだと思います。

有一 ..

パスカルは小さい時から孤独を感じていたのですか。

はじめ ..

彼は三才で母を亡くし、父は以後彼の教育に専念します。早くから学者たちと交わり、二三才で「パスカルの定理」を発見するという天才ぶりを発揮しますが、同年代の友人はなく、心をゆるめるのは姉と妹だけでした。そして、病気が彼を苦しめます。二四才頃衰弱が酷くなり、薬剤すら、「あため一滴ずつたらしこ」まねばならず、姉は「本当に業苦でした」と回想しています。当然、死が頭をよぎっていたと思います。

パスカルは繊細な心と天才的な知性によって、人間がもつて

いる逃れられない孤独な状態を突き詰めていきます。それを端的に「死ぬ時はひとりだ」(二五)と表現しました。姉さんが大学四年の時手術を受ける前、僕に、この言葉には誰も助けてはくれない死への彼の実存的不安が感じられる、と言っていました。その頃姉さんは熱心に『パンセ』を読んでいました。

母が手術を受けたことは知っていますが、そのことは今初めて聞きました。

はじめ..

沈黙する宇宙の中にひとり放り出されているような人間、誰も代わってくれず助けもなくひとりで死んでいかねばならない人間、そのような人間がもっている寄る辺なき孤独な状態を「考える」こと、それが「考える章」の出発点にあると思います。

有..

おじさんの話を聞いていて、だいぶ『パンセ』の構成が分かってきました。パスカルは『パンセ』の第一部で、「考える」こと、すなわち孤独を直視することから逃れようとする人間の悲惨な状況を描きだし、第二部で「正しく考える」内容を述べていくのですね。

パスカルは気晴らしを激しく攻撃していますね。



中谷傳幸 (なかにひろゆき)

1953年奈良県生まれ。香川大学名誉教授。主な研究対象はヨーロッパ文化史、特にドイツ近世キリスト教文化。

悲惨さを慰めてくれるのは気晴らしだけれど、そここそ悲惨なのなかで最大のものである、なぜなら「考える」ことから逃避させて、「知らず知らずのうちに死にいたらせる」(四一四)からである。この言葉をよく心に留めておきます。いわゆる賭け事やダンス、狩りなどだけでなく、王や大臣がする政治や戦争、学問追求なども悲惨な状況から目をそらすための気晴らしになる、というのは極端な議論だと感じましたが、今は一理あるなと思います。「およそ人間の不幸というものは、ひとつの部屋の中に、じっと静かに留まっていることができないという、ただひとつのことから起きている」(二三六)という言葉も、印象的です。

はじめ..

第二部の「正しく考える」内容は、「考える章」から「考える肢体」へという言葉で要約できると思います。

有..

この「肢体」というのはキリストと関係するのですか？その点に注意しながら、パスカルが孤独の解決をどう見出していたのか、もう一度読み返します。

はじめ..

ええ。今度その問題を、パスカルがキリストをどのように理解していたかを確認しながら、いっしょに考えましょう。

(続く)

CLC地下古書部の担当の水野です。今回のご紹介は、『聖書』です。

聖書は、文語訳、口語訳、共同訳、新共同訳、新改訳聖書、個人訳聖書、カトリック訳、リビングバイブル、英語聖書など、大版、小版が揃っています。

原典で読めればいいのですが、翻訳に頼らないと聖書は読めませんね。近年、新日本聖書刊行会が新改訳2017を2017年に、日本聖書協会は、聖書協会共同訳を2018年に出版しました。

どうして、こんなに多くの翻訳があるかというと、ことははその時代で変化しています。また、学術的な成果があつて原典に近く翻訳をしようとする試みがあるからです。

これまでの訳と違いがあると、どうして違つかを調べることも興味深く新たな発見をします。

聖書は人類に宛てられた神の愛のことばです。とにかく、聖書を読みましょう。

【書店ホランテア 水野 健】



CLCからしだね 地下古書部から

会員登録が必要です
書店カウンターにて
発行いたします
書店買まで
お気軽にどうぞ

お知らせ

からしだね館3階になんと茶室があるのをご存知でしょうか。さすが京都ですね。10月から、表千家離館による茶道教室が始まります。毎週金曜午後2時~5時です。

お問合せ、見学などは 080-3695-2142 水野までお願い致します。





あなたがたが、これらの私の兄弟たち、
それも最も小さい者たちの一人にしたことは、
わたしにしたのです。

(聖書 マタイによる福音書25章40節)

たけやま よりこ

アメリカの大学で音楽療法士のライセンスを取得し、アメリカの精神科病院や、日本の施設等で音楽療法の仕事をしました。その後、社会福祉法人ミッションからしだね設立チャーターメンバーとなり、約20年間、障害者の就労支援、生活相談支援など、精神保健福祉士として働きました。

今年3月に体の不調を覚え癌の診断を受け、仕事を続けながら苦しい治療にチャレンジしましたが、7月25日に53才の誕生日を祝った後、8月5日、天に旅立っていきました。

「CLCからしだね書店便り」にも「からしだね館の1コマこころ病む人の支援」というタイトルで2021年2月号、2022年12月号まで、連載をしています。ミッションからしだねの職員として、書店の配達員として、武山世里子さんと親しく関わってくださった皆様、お世話になった皆様に、本人になり代わって、ミッションからしだねから、心より御礼申し上げます。(店長)

ちよつと早め~~の~~早すぎる

わたしの遺言

社会福祉法人ミッションからしだね

武山世里子

「フランシスコ教皇の最後の手紙を読んだ時、私と教皇さんが重なる…といったら怒られそうですが、ほんまに、言うてはるんことが、自分の言いたいことのように思えて…」

「この世に私のものは一つもない」

この世のすべての愛する子どもたちへ。
私は今日、この人生を通り過ぎる者として、
小さな告白の一つ遺したいと思います。

毎日、顔を洗い、身だしなみを整え、鏡の前に立って生きてきました。
その姿が「私」だと信じていました。
しかし、振り返れば、それはただの、一時的にまとう衣でした。
私たちはこの身体のために、時間を使い、
お金を使い、愛情と情熱を注ぎます。
美しくありたい。
老いたくない。
病気になるたくない。
そして……死にたくないと願いながら。

ですが、結局この身体は、私の願いにかかわらず、
太り、病み、古い、そして、静かに私から離れていきます。
この世で、本当に「私のもの」と呼べるものは、一つもありません。
愛する人も、子どもも、友人も、そしてこの肉体さえも。
すべては、雲のように、一時的に留まるだけの存在です。

憎い縁も、美しい縁も、すべては私に与えられた人生の一部でした。

だから、避けられないなら抱きしめてください。
誰かがしなければならぬことなら、
「私が先に」そう思っ取り組んでください。
無理やりではなく、喜びの心で。
やらなければならないことがあるなら、先延ばしせず、
今日、今すぐに行きましょう。
あなたの前にいる人に、あなたのすべての心を注いでください。
泣けば、解決するでしょうか。
怒れば、良くなるでしょうか。
争えば、勝てるでしょうか。

この世の出来事は、すべて、
それぞれの流れに従っています。
私たちができるのは、その流れの中で少しの余白を与えることです。
少しの譲り合い。少しの思いやり。少しの控えめさ。
それが、誰かにとって温かな息抜きとなります。
そして、その温もりが、世界を再び包み込む力となるのです。
今、私は旅立つ準備をしながら、この言葉を遺したいと思います。

「本当に、ありがとう。」
私の人生に触れてくれたすべての人々へ。
すべての縁へ。
そして、この美しい世界へ。
「私と縁を結んでくれたすべての人々に、心から感謝します。」

静かに振り返ると、この人生は、
感謝に満ちた 奇跡のような旅でした。
どうか、あなたの人生にも、
このような静かな奇跡が 訪れますように。

心から お祈りしながら この手紙を終えます。

フランシスコ教皇 (2025年4月21日 帰天 88才)

「私達のできることは、小さくても、さわやかで、裏表のない、安心できる時間や場所を提供し続けることかもしれないですね。」

「私は私で、最期の日までこの世の美しさを楽しむつもりです。」

(武山さんからのLINEメッセージより)

読書感想本



微細な現実にあらわれる神

『日常を神とともに』

モーリス・ズンデル(著) (女子パウロ会)
税込価格…1,650円(税込)



7月の参議院選挙期間中に耳にした言葉の数々によって、私は疲弊していました。選挙入票というものが、あんなにも深いため息を吐かせるものだったとは…。弱者への八つ当たりという、もっとも幼稚で安易なストレス解消が、政治の世界で「すなわち大つぱらに、臆面もなく、大々的に」行われているのを見ることほど、暗澹たる気持ちにさせるものはありません。

さらには個人的な悩みや気分的な落ち込みが重なったことで、今までの自分を保つことができないかもしれないという気がしてきました。「このままでは、私もいつか絶望と憎しみへの誘惑に陥って××党に投票してしまう日が来るかもしれない」。そんな馬鹿げた(しかし恐ろしい)夢想が湧いてきたときに、私はそれを熱中症警戒アラートのようなものだと思えました。つまり、今は自分のケアに専念しなければならぬということです。生きていれば、そういう警報が頭の中で鳴り響く時もあります。

そこで私は、できるだけ地味な本を選んで、ゆっくり読んでみる

を知らない私には分かりませんが、神を語るその言葉には、たしかに体制的キリスト教の権威主義とは正反対の何かが感じられます。例えば、「共産主義とキリスト教」という、時代(1950年代)を感じさせる文章において、彼は「雇用者の側」「専制者の側」につくキリスト教を批判して次のように言います。

王の味方、専制者の味方、雇用者の味方！教会人たちがこんなにもたびたび定着した権威の側につくのはなぜなのか？それこそが、まさに無限に重大なことなのです。つまり、人々が雇用者の神、所有者である神、主人である神という観念を大事に保つてしまい、まったくの善意でもつてこのような神(偽りの神)に従うためには、その神を代表するすべての権威に従いつづけてはならないと思っていることです。

これは、まさに真摯で善良な人の立場です。しかし、これは神を王の王、すべての疑問を禁じ、その前でひざまずく以外にはない専制君主としてしか神を見ない人ではないでしょうか？(1頁)

そこでズンデルは、共産主義にどのように対するののかという時代的な問題を論しながら、しかしそれを超えた普遍的な問いを投げかけています。それは、神をどのような存在として理解しているのか

ということを試みました。自分の中に否応なく侵入してくるような派手で押しつけがましい言葉に疲れた私は、地味な言葉を読むことによって、言葉そのものとの距離を取ろうと思ったのです。

『日常を神とともに』という、カトリックの司祭の講話を集めた本を古書の中に見つけるまで、私は「モーリス・ズンデル」という名前を聞いたことがありませんでした。マルク・ドンゼという人が書いた「序」によると、この人は1897年にスイスに生まれたカトリックの司祭で、その「あまりにも変わったユニークな思想のために、自分の教区から追われた形で、長年のあいだ、フランス、イギリス、エジプトなどを転々としていた」そうです。「多くの人々が彼を一種の聖人と見なし、少なくとも神の熱狂者だと感じていた。食事はごくわずかしかとらず、ほとんど眠らず、タバコだけは太いに用いたが、それは思想を目覚めさせておくためで、煙を吸い込むことはなかった」…。

この人の思想のどこが「ユニーク」なのかは、カトリックの神学

という問いです。別の文章で、彼はヨブ記に描かれる神について次のように述べています。

とても美しいと思いますが、私には何も分かりません。強いことが優れているということを示される神、こんな神が私には分からないのです。私たちは神が強いから神と認めるのではなく、善い方だから神として認めるものではありませんか？もし神がいちばん強いというなら、私にはどうでもよくなります。神の前で、もう私たちはまったく無力でしょう。神が永遠にご自分の正義を主張されるからです。

地ならしをするローラーを愛することができでしょうか？力づくで押さえつけるものを愛することができでしょうか？人は善良さを、やさしさを愛しますが、自分を押しつぶすものを愛することはできないでしょう。(51頁)

ズンデルは、自分の偉大さによって人々をひれ伏させるような神を拒否しています。そのような神は、強さと引き換えに、人間から、そしてこの世界から遠く離れてしまっからです。それとは反対に、ズンデルにとって神とは、人が微細なものや、微小な瞬間を愛することによって知られるような存在です。なぜなら、そのような愛こ

そが神の愛だからです。

神はその愛に私たちをあずからせてくださり、私たちも愛によって彼にふれることができるのです。(58頁)

もともと微小な現実、最小の原子でさえ神の現存の顯示台であることを知っている被造物として、世界の次元、被造界の偉大さの中に入ると、主は私たちを招かれます。(157頁)

微細な現実においてあらわれる神は、ほほえみにたとえられます。それは人間に対する呼びかけでありながら、もし人間が無視したなら無かったことになってしまうほど、音もなく弱々しいものです。

だれかにほほえんだとき、冷たい表情しか返ってこないなら、ほほえみは何もできません。相手があなたの親しさに応えないなら、心をかよわせることはできません。これは神の力、応答がなければ何もできない神の愛の全能の力のもっとも暗示的な例です。(246頁)

このような弱い神のイメージは、多くのキリスト教徒にとって新鮮なものでしょう。反発を感じる人もいられるかもしれません。とい

うのも、具体的なものにこだわることは、知的・感情的な体力を要することだからです。一々立ち止まって考え直すよりも、「地ならしをするローラー」のような力強い神のイメージで、具体的なものを一様に解釈してしまう方が楽なのです。

しかし、揺れ動く現実を通して常に新しくあらわれる神だからこそ、そのイメージは汲みつくせない豊かさを持つとも言えます。

神はつねに新たに知られ、つねに知られざる神です。神はつねにより美しい方……。そして、私が、人それぞれに与えられる泉を毎日発見するように努めるなら、死ぬまで日々新たな神を見出すでしょう。(211頁)

強い言葉や概念がすべてを押し流してしまうのを防ぐには、微小なものにこだわり、立ち止まって考え、考えつつ歩く以外にはないのではないのでしょうか。この地味な本は、大げさな言葉が飛び交う参院選の喧騒に疲れた私に、小さなものにこだわってゆっくり進むことの意味を考えさせてくれました。

一步一步確かめながら歩くには体力が要ります。セルフケアを怠らず、栄養のあるものを食べて、十分な睡眠をとり、体力を養ってこの暑い夏を乗り切りましょう。

【書店員G】

新メニューのご紹介
ランチ限定!

定番のスパゲッティ!

ナポリタン
700yen
(税込)

昔ながらのナポリタン。口の周りのケチャップを拭きながら召し上かれ!

トマトの甘酸っぱさが◎

ベーコンとトマトの
ハーフサイズピザ
500yen
(税込)

オレガノが香る自家製トマトソースが自慢。
軽食にもぴったりのサイズ。

たいへん申し訳ございませんが、送料をご負担いただけるとありがたいです。(受付できないものもありますので事前にお知らせください。)

【献本をお願いしたい本の種類】

- 1 キリスト教書、キリスト教に関連した本(多少、書き込み等があっても、大丈夫です)
- 2 哲学、心理学等、人の生き方に関する本
- 3 社会の中で起きている問題を扱った本
- 4 暮らし(料理、健康、経済等)にかかわる本
- 5 小説(人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません)
- 6 漫画(人の暮らし、尊厳、生き方を表現したものであればジャンルを問いません)

百科事典・辞書・開封済みのCD・DVD・月刊誌・週刊誌、
自分史・教会の記念誌などは
受け付けておりません

【本の送り先】

住所: 〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館
宛先: CLC からしだね書店 献本係 電話: 075-574-1001 FAX: 075-574-0025
Mail: clc@karashidane.or.jp

【本と一緒に以下の内容を記入したメモをお願いします】

①献本者のお名前②ご住所③お電話番号④メールアドレス⑤さしつかえなければ、献本者の簡単なプロフィールをお願いします。

【献本感謝】

上原様、安田正人様、
竹川満里子様(順不同)

7月の古書の収益は 72,290 円でした。

【古本の売上を含む CLC からしだね書店の収益は、書店で働く障がい者の工賃になります】献本くださった方のお名前を書店便りにご紹介させていただきたいと思ひます。匿名ご希望の方は、お知らせください。ご寄贈いただいた皆様、ありがとうございました。

編集を終えて...

◆今年も、また8月がやってきました。世界が、日本が、「平和・自由・いのちの尊厳」とは反対の方向に歩き出しているような、いやな気配を感じる昨今です。◆「戦争が廊下の奥に立つてゐた」渡辺白泉の1939年の俳句です。この2年後に、日本は第二次世界大戦に参戦することになります。◆8月10日放送のNHKスペシャル「イロン・マスク“アメリカ改革”の深層」をみたのですが、正直、ぞっとし、背筋が凍りました。まるで近未来のディストピア小説の始まりのようでした。◆マスク氏は、DOGE(政府効率化省)に自分の息のかかった人間をどんどん送り込み、アメリカ政府の中枢に食い込んで、人間が考えるのではなく、AIに考えさせ、すべてを統治させる世界を作ろうとしているかのようでした。◆「歴史と対話し歴史に学ぶ」で紹介された「わたしたちの尊厳のすべては、考えることのうちにある。まさにここから、わたしたちは立ち上がらなければならない...だから、正しく考えるように努めようではないか」というパスカルの言葉を、今一度、噛みしめたいと思ひます。◆武山世里子さんを天に送りました。あまりにも早く、目の前をビュン!と走り去ってしまった大切なひと。苦楽を共にし、祈り合った同志、家族のようなひとがなくなった喪失感を、どう表現したらよいのかわかりません。◆あのひまわりのような笑顔と元気な声、はつらつとした姿を、もうこの地上では二度と見ることができないのだと、何回自分に言い聞かせても、こころがそれを跳ね返してしまいます。こころがそれを信じようとしません。◆いつものデスクから立ち上がって、いつものように「ほな、行ってきます!」と飛び出して行っただけ、なかなか帰ってこないけれど、気がつけば私たちのオフィスの日常にまぎれて、役所や関係機関に電話をしている彼女を、こころは当然のことのように待ち構えているのです。◆彼女がいない職場で、ふっと急に悲しくなります。神様、なんでですか?意味がわかりません!いきなり突き付けられたこの「理不尽」のやり場のない悲しみを、「理不尽」の張本人の神様のところにぶつけて泣いています。武山さん、なんで、ここにいいひんの?【店長】



編集・発行: 社会福祉法人ミッションからしだね
就労継続支援B型事業所からしだねワークス
CLCからしだね書店&カフェ・トライアングル

〒607-8216 京都市山科区勤修寺東出町75 からしだね館
書店電話番号 075-574-1001 FAX 075-574-0025
書店メール clc@karashidane.or.jp



CLCからしだね書店便りの
バックナンバーはこちらから